外国語学習におけるモーティベーションの測定について

広島大学大学院　三　浦　省　五

〔 I 〕

外国語学習に含まれる多くの問題点の中から，主として外国の文献をもとにしながら，外国語学習におけるmotivation の概念と，その測定がいかに応用できるかを考察したい。したがってここでは，どのようにしたら学習者の外国語学習に対する興味を持続させることができるかとか，どの方法が学習者をmotivate するのに最適であるかを問題にしているのではない。これは，それらの課題に対して準備的なものである。

〔 II 〕

Motivation に関して，その「種類」と「強さ」という2つの面が考えられる。そして「種類」は，本質的には，目的との関連で論じられるべきもので，次のそれぞれの項目に関してこの2つの面は考慮されなければならない。

A. Orientation: A. H. Marckwardtは，外国語学習の動機を non-utilitarian なもの (1. provision of a cultural background, 2. influence of foreign speech islands) と practical なもの (3. necessity for political and cultural unification, 4. purposes of colonization and commerce, 5. necessity of reading scientific and technical works)の2種類をあげている。これら2種類の動機は，W.E.Lambert の言語心理学的2区分，すなわち integrative motive（統合的動機）と instrumental motive（道具的動機）に一致するもので，前者は，"characterized by a willingness to be like valued members of the language community" (3:271)と性格づけがなされているように，外国語学習の態度は母国語学習のそれに類似している。この動機による学習の結果は，coordinate bilingualism と呼ばれ，かつて外国語であった言語は思考の一部として母国語と同様の働きをする。一方後者は，外国語を単に道具として用いたいという動機で，たとえば，「よりよい職に就きたい」，「社会的に認められるには外国語の知識が必要である」とか，「学校を卒業するためには外国語学習はどうしても必要である」などの理由が学習の目的となっている場合である。このような動機で学習すると compound bilingualism が形成される。この項目では，学習者の外国語学習の方向づけを知ることが目的である。

B. Intensity of motivation: この項目では，上述の目的達成のため，外国語学習者がある時点において，自主的，あるいは義務的に，いかなる学習活動に，どの程度の時間従事しているかを測定する。

以上A，B 2つの項目において，学習者の目的と方向づけ，さらにmotivationの「強さ」を測定するわけであるが，これらは学習に対するmotivation の表面的な特徴であって，次には，何がその誘因であるかを見極める必要がある。A，Bに影響すると考えられる項目は次のものである。(注)

1. Personal history and personality: 学習者の言語学習経験を含めたあらゆる学習経験

で，ある一定の外国語や，それを話す国，国民に対する価値観，態度と関連を持ち，性格は，外国語学習の持久力，習得する言語技能の種類に関すると考えられる。

2. Desire to learn the language: ある1つの外国語のどの面を，どの程度，どのような方法で学習したいかという願望の問題である。
3. Desire to live or stay in the country where it is used
4. Attitude toward the language
5. Attitude toward the country where the language is used
6. Attitude toward the people who use the language
7. Attitude toward the sound of the language

その国の歴史的，文化的，民族的貢献，あるいは，政治，経済，文化，科学などの分野におけるその言語の有用性は，4，5，6，7の態度の問題を生む。

8. Parental and others' encouragement
9. Attitude toward language instruction at school: 教材の内容，教授法をはじめ，学校の環境，教師に対する態度を含む。

〔 Ⅲ 〕

厳密に言えば，すべての学習者はその要因によって異なっている。外国語学習に意欲的な者とそうでない者が存在している事は事実である。たとえ学習に対する願望や学習に費やす時間が等しいとしても，その誘因は異なっているかもしれない。教授者は，学習者の特性を知り，教授者の，あるいは学習者の目標まで到達させねばならない。

これらの学習者の要因を調査するに当たって，学習者が外国語学習の目的を意識する年令に達していないならば，その調査の信頼性が減少することや，外国語（たとえば英語のように）が1つの民族，1つの国にとどまっていない場合，その性格づけが困難であることなど，問題点はあるとしても，(1)外国語を学習する以前の学習者に対してはreadinessの調査として，あるいは(2)教授内容，教授法の妥当性を高める資料として利用できる。W.M.Riversの外国語学習過程の第3段階に到達するまでの学習者の意識の変化を長期にわたって観察し，dropoutの可能性を未然に防止する。また(3)クラス編成に関して，初期の段階では言語適性を，後期に移るに従って，motivationの「種類」によって活動内容を選択させ，クラス分けを行なう事も可能である。そして(4)学習者のある1つの外国語だけでなく，他の外国語に対する態度をも比較できるなど，種々の応用面が考えられる。

〔 Ⅳ 〕

我が国において，motivationに関して，十分な研究があまりなされていないのは，その概念規定とそれに関連する変数の測定が困難であることがあげられる。これは，motivationが「無」ということではなく，その問題が大きな位置を占めなかったということである。motivationの2面は，学習者の住む環境，外国語コース，個人差によって異なり，その要因は，最初から決ったものがあるわけではなく，motivationの「強さ」に関連のある他の変数から推察されるものである。ここでは若干の資料に基づいて，motivationの考え方を体系化し，その応用面を述べたにすぎない。

(注) これらの分類は，昭和45年1月，2月にこの問題に関係ある item を抽出すべく，広島市内のある中学校，高等学校に依頼し，約100名の学生から意見を自由記述の方法で集め整理したものである。

References

1. Allen, H. B. (Ed.), Teaching English as a Second Language, McGraw-Hill, 1965, 38-50
2. Dunkel, H. B., Second-Language Learning, Ginn, 1948, 100-110.
3. Gardner, R. C. and W. E. Lambert, "Motivational Variables in Second-Language Acquisition," Canadian Journal of Psychology, 1959, 13, 266-272.
4. Haugen, E., "Bilingualism as a Goal of Foreign Language Teaching," On Teaching English to Speakers of Other Languages, Series I, 1965, 84-88.
5. Marckwardt, A. H., "Motives for the Study of Modern Languages," Selected Articles from Language Learning, No. 1, 1963, 2-10.
6. Najam, E. W., Language Learning: The Individual and the Process, Mouton, 1966, 24-44.
7. Rivers, W. M., The Psychologist and the Foreign-Language Teacher, Univ. of Chicago Press, 1964, 82-90.